

武蔵野日曜集会 復活節祈禱会

復活の悦び

――ロマ8、コリント前15、ペテロ前1、2、ペテロ後3――

1994年4月3日

小池辰雄

望の根拠は神の本願 無は無我のこと 復活は新生・永生・霊生 永遠の生命の悦び 肉体から霊体に化する

【ロマ8・18～39】

18 われ思うに、今の時の苦難は、われらの上に顕れんとする栄光にくらぶるに足らず。19 それ造られたる者は切に慕いて神の子たちの現れんことを待つ。20 造られたるものの虚無に服せしは、己が願によるにあらず、服せしめ給いし者によるなり。21 然れどなお造られたる者にも滅亡の僕たる状より解かれて、神の子たちの光栄の自由に入る望みは存れり。22 我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。23 然のみならず、御霊の初の実をもつ我らも自らの心のうちに嘆きて子とせられんこと、即ちおのが体の贖われんことを待つなり。24 我らは望によりて救われたり、眼に見ゆる望は望にあらず、人その見るところを争でなお望まんや。25 我等もし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん。

26 斯くのごとく御霊も我らの弱を助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き嘆きをもて執成し給う。27 また人の心を極めたもう者は御霊の念をも知りたもう。御霊は神の御意に適いて聖徒のために執成し給えばなり。28 神を愛する者、すなわち御旨によりて召されたる者の為には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。29 神は予じめ知りたもう者を御子の像に象らせんと予め定め給えり。これ多くの兄弟のうちに、御子を嫡子たらせんが為なり。30 又その予め定めたる者を召し、召したる者を義とし、義としたる者には光栄を得させ給う。

31 然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。32 己の御子を惜まずして我ら衆のために付し給いし者は、などか之にそえて万物を我らに賜わざらんや。33 誰か神の選び給える者を訴えん、神は之を義とし給う。34 誰か之を罪に定めん、死にて甦えり給いしキリスト・イエスは神の右に在して、我らの為に執成し給うなり。35 我等をキ



リストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か。36 録して『汝のために我らは、終日、殺されて屠らるべき羊の如きものと為られたり』とあるが如し。37 然れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち得て余あり。38 われ確く信ず、死も生命も、御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、39 高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。

【コリント前15】

「35 然れど人あるいは言わん、死人いかにして甦えるべきか、如何なる体をもて来るべきかと。36 愚かなる者よ、なんじの播く所のもの先ず死なずば生さず。37 又その播く所のものは後に成るべき体を播くにあらず、麦にても、他の穀にても、ただ種粒のみ。38 然るに神は御意に随いて之に体を予え、おのおのの種にその体を予えたもう。39 凡ての肉、おなじ肉にあらず、人の肉あり、獣の肉あり、鳥の肉あり、魚の肉あり、40 天上の体あり、地上の体あり、されど天上の物の光栄は地上の物と異なり。41 日の光栄あり、月の光栄あり、星の光栄あり、此の星はかの星と光栄を異にす。42 死人の復活もまた斯のごとし。朽つる物にて播かれ、朽ちぬものに甦えらせられ、43 卑しき物にて播かれ、光栄あるものに甦えらせられ、弱きものにて播かれ、強きものに甦えらせられ、44 血氣の体にて播かれ、霊の体に甦えらせられん。血氣の体ある如く、また霊の体あり。45 録して始の人アダムは、活ける者となれりとあるが如し。而して終のアダムは、生命を与うる霊となれり。46 霊のものは前にあらず、反って血氣のもの前にありて霊のもの後にあり。47 第一の人は地より出でて土に属し、第二の人は天より出でたる者なり。48 この土に属する者に、すべて土に属する者は似、この天に属する者に、すべて天に属する者は似るなり。49 我ら土に属する者の形を有てることく、天に属する者の形をも有つべし。50 兄弟よ、われ之を言わん、血肉は神の国を嗣ぐこと能わず、朽つるものは朽ちぬものを嗣ぐことなし。51 視よ、われ汝らに奥義を告げん、我らは悉とく眠るにはあらず、52 終のラッパの鳴らん時みな忽ち瞬間に化せん。ラッパ鳴りて死人は朽ちぬ者に甦えり、我らは化するなり。53 そは此の朽つる者は朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るべければなり。54 此の朽つるものは朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るとき『死は勝に呑まれたり』と録されたる言は成就すべし。55 『死よ、なんじの勝は何処にかある。死よ、なんじの刺は何処にかある』56 死の刺は罪なり、罪の力は律法なり。57 されど感謝すべきかな、神は我らの主イエス・キリスト



によりて勝を与えたもう。⁵⁸然れば我が愛する兄弟よ、確かたくして揺うごくことなく、常に励みて主の事を務めよ、汝等その労の、主にありて空しからぬを知ればなり。」(コリント前15・35〜58)

【ペテロ前1】

「¹⁰汝らの受くべき恩恵を預言したる預言者たちは、この救につきて具しづに尋ね查べたり。¹¹即ち彼らは己が中に在いますキリストの霊の、キリストの受くべき苦難および其の後の栄光を預あらわめ証して、何時のころ如何なる時を示し給いしかを查べたり。¹²彼等はその勤むるところ己のためにあらず、汝らの為なることを黙示によりて知れり。即ち天より遣され給える聖霊によりて福音を宣ぶる者どもの、汝らに伝えたる所にして、御使たちも之を懇ろに視んと欲するなり。

¹³この故に、なんじら心の腰に帯し、慎みてイエス・キリストの現れ給うときに与えられんとする恩恵を疑わずして望め。……

²³汝らは朽つる種に由らで、朽つることなき種、すなわち神の活ける限りなく保つ言によりて新あらたに生まれたればなり。²⁴『人はみな草のごとく、その光榮はみな草の花の如し、草は枯れ、花は落つ。²⁵されど主の御言は永遠に保つなり』汝らに宣のべつた福音の言は即ちこれなり。」(ペテロ前1・10〜25)

【ペテロ前2】

「⁴主は人に棄てられ給えど、神に選ばれたる貴き活ける石なり。⁵なんじら彼にきたり、活ける石のごとく建られて霊の家となれ。これ潔き祭司となり、イエス・キリストに由りて神に喜ばるる霊の犠牲いけにえを献げん為なり。⁶聖書に『視よ、選ばれたる貴き隅すみの首石おやしを我シオンに置く。之に依り頼む者は辱しめられじ』とあるなり。⁷されば信ずる汝らには、尊きなれど、信ぜぬ者には『造家者いせいらの棄てたる石は、隅の首石となれる』にて、⁸『つまずく石いさま、礙さまたたる岩』となるなり。彼らは服したがわぬに因りて御言に躓く。これは斯く定められたるなり。⁹されど汝らは選ばれたる族やから、王なる祭司・潔き国人・神に属つける民なり、これ汝らを暗黒くらより召して、己の妙なる光に入れ給いし者の誉ほまれを顕あせん為なり。¹⁰なんじら前まへには民にあらざりしが、今は神の民なり、前には憐憫あわれみを蒙こうむらざりしが、今は憐憫を蒙れり。」(ペテロ前書2・4〜10)

【ペテロ後3】

「⁸愛する者よ、なんじら此の一事を忘るな。主の御前には一日は千年のごとく、千年は一日のごとし。⁹主その約束を果すに遅きは、或人あるの遅しと思うがごときにあらず、ただ一人の亡ぶるをも望み給わず、凡ての人の悔改に至らんことを望みて、汝らを永く忍び給うなり。」(ペテロ後3・8〜9)



●望の根拠は神の本願

ローマ書8章を開いてください。

「¹⁸われ思うに、今の時の苦難は、われらの上に^{あらわ}顕れんとする栄光にくらぶるに足らず。

苦難に遇うこと、人によつて苦難の内容はいろいろ違うわけです。とにかく、苦難を受けないと本当の世界に入れない。単なる順調ではダメだということ。本当に生きていますと必ず苦難が伴うと言つてもいいくらいです。苦難が伴わないでいるのは、むしろ逆に、いい加減にやっているということになるわけです。

「艱難汝を玉にする」

という昔の諺ことわざがありますが、そういうことです。現世の苦難というものは、来たらんとするところの栄光、来世の栄光に比べるに足らない。この世で労苦する人は次の世界で天国的な現実にはいる。この世でいわゆる天国的に暮らしていると、次はヘタすると天国にはならない。そういつたようなわけです。この世で労苦した人は次の世界では喜びのパラダイスに入る。何も人と比較する必要はない。また、

「神さまは不公平だ」

なんて思ふ必要はない。

「いろいろな事に出会せば出会すほど逆に自分は本当の恵みに与かっているんだ」というわけです。

¹⁹それ造られたる者は切に慕いて神の子たちの現れんことを待つ。

「造られたる者」とは万物、被造物のこと。「神の子たち」とは、キリストを受けとっている人たち、身体でもつてキリストの栄光を現している人たち。我々の人生の目的は神の独子キリストの栄光を現す証者となること。そのためには苦難を経なければいかんということです。

²⁰造られたるものの虚無に服せしは、己が願ひによるにあらず、服せしめ給

いし者によるなり。

「虚無に服せし」とはアダム・イブ以来の人間の罪の歴史です。そのために空しくなつた。「服せしめ給いし者」とは神さまのことです。

²¹然れどなお造られたる者にも滅亡の僕たる状より解かれて、神の子たちの

光榮の自由に入る望みは存れり。」(ロマ8・18〜21)

現実を見ると、なかなか「望み」は簡単に分らない。神の力によらないと、みな滅びてしまう。「諸行無常」というけれども、また、

「人は草のごとし、みな枯れてしまう」

とイザヤ書にもあるように、この世の在り方をやっていると、どんなに栄光であるように見えても、終りは情けない。ところが、この世にあつていろいろな艱難にあつても神の力、



キリストの生命をいただいている者は滅びに至らない。神の子たちの光栄の自由に入る望みは残っている。

望みの根拠というのとはただ願いではない。望みの根拠は神さまの本願による。「本願」という言葉は聖書にはないけれども、私は本願という言葉は大好きなんだ。本願というのは神の願いですから、神さまの祈りですから、本願というのは素晴らしい言葉です。我々は本願によって導かれている。祈りは本願に應ずるものであって、祈りの強弱ではない。本願を受けとっているかどうか。本願を本当に受けとることが本当の祈りになる。

本願は別な言葉でいうと「御意」^{みごころ}です。御意は私たちをどんなことがあっても救い上げようとしている。救わんとしているのが神さまの御意ですから。

「一人も滅びざらんことを」

と、ペテロ後書に書いてある。

「愛する者よ、なんじら此の一事を忘るな。主の御前には一日は千年のごとく、千年は一日のごとし。主その約束を果すに遅きは、或人の遅しと思うがごときにあらず、ただ一人の亡ぶるをも望み給わず、凡ての人の悔改に至らんことを望みて、汝らを永く忍び給うなり。」(ペテロ後書3:8-9)

とある。一人も滅びないことを願っている。それが本願です。

「もし世の中に救われない人があるなら、それは私だ」

と内村鑑三は言いました。

「万人が救われる望みは、私が救われるという神さまの願いよ。だから万人は救われる。救われない人があるなら、それは私だ。それくらい私はしょうがない者だ」

と、内村先生は告白しています。

●無は無我のこと

私はよく「無」ということを言いますが、無は「無我」のことです。無が無我であるという、その姿は何かというと、平伏^{ひれふ}しです。平伏しの姿。魂が平伏しているということ。これは非常に大事なことです。神さまの前に平伏している。神・キリストの前に平伏さないような魂であつたらダメなんだ。無我の姿は平伏しなんです。なぜ平伏すかということ、これはキリストの救いに、贖いに我々は平伏さざるを得ない。我が無いということは、無の姿が平伏しなんです。

そこには今度は、キリストが聖霊をもつて入ってきてくださる。聖霊が入ってきてくださる。無我でなければ聖霊は入ってこない。この無我も悟りではない。これは十字架の贖いで無にされている。無我は賜りたる無我ですから、こんな有難いことはない。自分を何ものともしないということ、

「われ何ごをも為し能わず」



とキリスト自身が仰ったけれども、「自分は何ものでもない」ということ、これが「霊が貧しい」ということです。

「恵福なるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

そこに天国が入ってくる。

「私が入ってくるぞ」

と。あのキリストの山上の大告白の最初の言葉は素晴らしい言葉です。

「恵福なるかな、霊の貧しき者、

霊の貧しき無我なる者、

天国は

聖霊の我は、

汝の中にあり」

そういう世界が本当の栄光の自由の世界なんです。本当の自由というのは聖霊のある世界です。

「御霊のあるところに自由あり」

とパウロがローマ書で語っていますが、そのとおりです。普通の人が言っている「自由」なんてのは自由ではない。本当の自由というのは御霊のあるところにある。

我々にとっては、「復活」なんて言いましても、聖霊を受けると、むしろ復活というよりも「新生」、新しき生命といたい。復た元へ戻るといふ復活なんていうのではなくて、聖霊を受けると新生になる。我々は毎日、この新生、新しき生命でいかななくてはいかん。

「日々に新たなり」

という。「日進月歩」という言葉があるけれども。

「²³汝らは朽つる種に由らで、朽つることなき種、すなわち神の活ける限りなく保つ言ことばによりて新あらたに生まれたればなり。²⁴『人はみな草のごとく、その光

榮はみな草の花の如し、草は枯れ、花は落つ。²⁵されど主の御言は永遠に保つなり』汝らのべつたに宣伝のべつたえたる福音の言は即ちこれなり。」(ペテロ前書1・23〜25)

「福音の言は永遠だ」ということは、「言が永遠の生命をもつ」ということ。生命を持っているから滅びない。

「神の言を受ける」

ということとは直ちに、

「滅びざる生命を受ける」

ということと同じことになるわけです。言がただ意味の言葉では絶対でない。実力をもつた言だから力が入ってくる。



●復活は新生・永生・霊生

復活は我々には新生なんです。新生の喜びです。キリストは常に新たなる滅びないところの生命、永遠の生命を持つている。永生の喜びといってもいい。黒崎先生が自分の雑誌を『永遠の生命』という名前にした。「永生」です。キリストを受けとったから我々は死なない。「死」という言葉は我々には意味をなさなくなった。向こう側に往って生きる、正に「往生」だ。我々は死なないんだ。肉体は滅びることはパウロが言っている。けれども、次には滅びないところの新しい霊生がある。霊生が、霊の生命が与えられる。キリストは霊生で生きていた。十字架に架かったって、必ずこの霊生で現れてきた。復活のキリストとは霊生のキリストなんだ。これが復活の真義だ。復活という言葉にとらわれないようにしてください。永生、霊生、永遠の生命、霊的生命です。だから、我々は滅びない。肉体は滅びても絶対に滅びない。ロマ書8章22節、

「²²我らは知る、すべて造られたるもの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。²³然のみならず、御霊の初の実をもつ我らも自らの心のうちに嘆きて子とせられんこと、即ちおのが体の贖われんことを待つなり。

「おのが体の贖われんこと」というのは、新生のことです。新しい新生、霊生、永生、不滅の生命です。

²⁴我らは望によりて救われたり、眼に見ゆる望は望にあらず、人その見るところを争でなお望まんや。

「我らは望によりて救われたり」というのは、そのような望みによりということ。この「望みによりて」ということはむしろ、

「我らは本願により救われたり」

ということ。キリストの、神さまの本願で救われた。そこをはつきりそう言いたい。本願を受けとることが「望み」なんだから。本願のないところには、我々の願望なんでものは、望みでも何でもない。永遠の生命が約束されている。それを受けとることが望みの内容です。

²⁵我等もし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん。

²⁶斯くのごとく御霊も我らの弱を助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き嘆き（呻き）をもて執成し給う。

これが本願の執成しです。御霊の執成し。これは素晴らしい言葉だ。「言い難き嘆き」ではなく、これは「呻き」です。

²⁷また人の心を極めたもう者は御霊の念をも知りたもう。御霊は神の御意に
適いて聖徒のために執成し給えばなり。」（ロマ8・22〜27）

そのとおり。結局、本願の祈りです。神さまの力、生命、光、それに圧倒されること。だから、言うことなしです。



「人間の願いのいかんによって救われるか救われないか」
 なんて、そんなことでは絶対がない。そうすると、いわゆる

「ワツシヨイ、ワツシヨイ」

という熱っぽい祈りになって、

「祈りが熱っぽければいい」

なんて思ったら、冗談じゃない。

●永遠の生命の喜び

祈りというなら、祈入です、祈り入る。キリストの中に祈入する。私は寝る前にキリストに祈るときにはいつも、

「主さま、あなたの御懐の中に寝かしてください」

と祈る。安眠してしまふ。眠れないということはない。霊の世界というのは不思議なもので、キリストは一人しかいないけれども、誰が祈ったって、みな受けとる。これは御霊のキリストだから。宗教の世界はそういうもの凄い神秘の世界、ミステリオンの世界です。

「どんなものも神・キリストの愛から我らを離すことができない」

と、パウロは絶叫している。

「³⁸われ確^{かた}く信ず、死も生命^{いのち}も、御使^{みつかい}も、権威ある者も、今ある者も後あらん

者も、力ある者も、³⁹高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主

キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。」(ロ

マ8・38〜39)

これが本願の力です。「本願の劫力^{じゆうりき}」という。光も、人間がどんな電気の光を作ったって、太陽の光にはかなわない。太陽の光、神の光には。

それが本当の生命、永遠の生命の喜びなんです。だから、復活という言葉が我々にはもう余り意味をなさなくなってきた。ありきたりの概念を乗り越えなければダメですよ。本当の世界は言葉では説明なんかできるものではない。説明ができるようなものは大したものではない。魂が、霊と霊とがパツと、

「はいそのとおり」

と応えるようにならないとね、お互いさま。

やはり、エライことが書いてあるな。

「¹⁰汝らの受くべき恩恵を預言したる預言者たちは、この救につきて具^{しるし}に尋ね

查^{しら}べたり。¹¹即ち彼らは己^{おのれ}が中に在^{いま}すキリストの霊の、キリストの受くべき

苦難および其の後の栄光を預^{あらか}じめ証して、何時のころ如何なる時を示し給い

しかを查べたり。¹²彼等はその勤むるところ己^{おのれ}のためにあらず、汝らの為な

ることを黙示によりて知れり。即ち天より遣され給える聖霊によりて福音を



宣ぶる者どもの、汝らに伝えたる所にして、御使たちも之を懇ろに視んと欲するなり。

13 この故に、なんじら心の腰に帯し、慎みてイエス・キリストの現れ給うときに与えられんとする恩恵を疑わずして望め。」(ペテロ前書1・10～13)

これはこの時のことだからこうだけれども、我々はもつとはつきりとそれが受けとれるわけです。聖書はやはり凄い。

「4主は人に棄てられ給えど、神に選ばれたる貴き活ける石なり。

「活石」だと。

5 なんじら彼にきたり、活ける石のごとく建られて霊の家となれ。

「我々自身が霊の家であれ」と。

これ潔き祭司となり、イエス・キリストに由りて神に喜ばるる霊の犠牲を獻げん為なり。6 聖書に『視よ、選ばれたる貴き隅の首石を我シオンに置く。之に依り頼む者は辱しめられじ』とあるなり。7 されば信ずる汝らには、尊きなれど、信ぜぬ者には『造家者らの棄てたる石は、隅の首石となれる』にて、8 『つまずく石、礙ぐる岩』となるなり。彼らは服わぬに因りて御言に躓く。これは斯く定められたるなり。

「人には躓く石だ」と。

9 されど汝らは選ばれたる族、王なる祭司・潔き国人・神に属ける民なり、これ汝らを暗黒より召して、己の妙なる光に入れ給いし者の誉を躓させん為なり。10 なんじら前には民にあらざりしが、今は神の民なり、前には憐憫を蒙らざりしが、今は憐憫を蒙れり。」(ペテロ前書2・4～10)

我々にとっては、新生・永生の喜びです。こうなると、復活という言葉があまり意味をなさなくなってしまう。そこに死という関門を考えるからです。こんな関門は要らない。霊体をもって次の世界に往くんだから。

● 肉体から霊体に化する

そこはパウロはいいよ、

「血気の体あり、霊の体あり」

と言っている。コリント前書15章35節から、

「35 然れど人あるいは言わん、死人いかにして甦えるべきか、如何なる体をもて来るべきかと。36 愚かなる者よ、なんじの播く所のもの先ず死なず生さず。37 又その播く所のものは後に成るべき体を播くにあらず、麦にても、他の穀にても、ただ種粒のみ。38 然るに神は御意に随いて之に体を予え、おのおのの種にその体を予えたもう。39 凡ての肉、おなじ肉にあらず、人の肉



あり、獣の肉あり、鳥の肉あり、魚の肉あり、⁴⁰天上の体あり、地上の体あり、されど天上の物の光栄は地上の物と異なり。⁴¹日の光栄あり、月の光栄あり、星の光栄あり、此の星はかの星と光栄を異にす。⁴²死人の復活もまた斯のごとし。朽つる物にて播かれ、朽ちぬものに甦えらせられ、⁴³卑しき物にて播かれ、光栄あるものに甦えらせられ、弱きものにて播かれ、強きものに甦えらせられ、⁴⁴血氣の体にて播かれ、靈の体に甦えらせられん。血氣の体ある如く、また靈の体あり。

これです。

⁴⁵録して始の人アダムは、活ける者となれりとあるが如し。而して終のアダムは、生命を与うる靈となれり。⁴⁶靈のものは前にあらず、反つて血氣のものの前にありて靈のもの後にあり。⁴⁷第一の人は地より出でて土に属し、第二の人は天より出でて土に属する者なり。⁴⁸この土に属する者に、すべて土に属する者は似、この天に属する者に、すべて天に属する者は似るなり。⁴⁹我ら土に属する者の形を有てることく、天に属する者の形をも有つべし。⁵⁰兄弟よ、われ之を言わん、血肉は神の国を嗣ぐこと能わず、朽つるものは朽ちぬものを嗣ぐことなし。⁵¹視よ、われ汝らに奥義を告げん、我らは悉とく眠るにはあらず、⁵²終のラッパの鳴らん時みな忽ち瞬間に化せん。ラッパ鳴りて死人は朽ちぬ者に甦えり、我らは化するなり。

肉体から靈体に化する。

⁵³そは此の朽つる者は朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るべければなり。⁵⁴此の朽つるものは朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るとき『死は勝に吞まれたり』と録されたる言は成就すべし。⁵⁵『死よ、なんじの勝は何処にかある。死よ、なんじの刺は何処にかある』⁵⁶死の刺は罪なり、罪の力は律法なり。⁵⁷されど感謝すべきかな、神は我らの主イエス・キリストによりて勝を与えたもう。⁵⁸然れば我が愛する兄弟よ、確くして揺くことなく、常に励みて主の事を務めよ、汝等その労の、主にありて空しからぬを知らばなり。(コリント前書15・35〜58)

「もう世の終りは近い」というので、

「終のラッパの鳴らん時」

と言っているわけです。預言というものはその時の状況において言われている言葉ですから、それがその時の状況から時間がたつというのと、その預言は現実には空しいようだけれども、預言の内容はいつまでたつても新しい。

「上からの力、光」

とか、



「不滅の希望」

とか、こういうものを一般の方々が知らないのは本当に気の毒に思う。

「聖書を読みなさい」

と言いたくなるわけだ。本当の喜びや本当の望みを何もたないからね、普通の人だ。ただ

「ああ、仕方がない」

と諦めている。

日本語の「さよなら」という言葉はあまりよくない。「それなら」といつて諦めるんだよ、あの

「さようなら、さらば」

というのは。ところが、ドイツ語の「アウフヴィーダゼーン」というのは、

「また会いましょう、再会を期して」

という意味だからいい。英語の「グッドバイ」は、

「神さまが共にいらつしやるように」

という、それもいい言葉だ。日本人は諦めたね、「さようなら」は。

「では、しょうがない、さらば別れん」

という、諦めの言葉だ。日本人というのは諦めやすいようだ、非常に現実主義だ。その現実を肯定するのが仏教的な悟りだ。仏教はやはり静かなんだ、静的だ。

キリスト教は動的だ。静動一如ということ。仏教の善さもキリスト教の善さも両方ともちゃんとつかまえることができるのは、この聖霊を有つことです。私は仏教をけなしているわけではない。仏教も、仏の世界もいろいろある。静動一如です。本当の世界はもう宗派を乗り越えているから。「宗教」(レリジョン、レリガール)という言葉は本当はおかしな言葉だ。

そういうわけで、私たちには永生の喜びがある。復活でなくて、永生の喜びです。永遠の生命の喜びです。

